

オペラ作曲家ゴットフリート・フォン・アイネムにおける 「音楽と言葉の問題」について

—ふたりの劇作家、ブレヒトとデュレンマットとの合作を巡って—

城田 千鶴子

日本におけるゴットフリート・フォン・アイネム (1918-1996) の知名度はまだまだ高いとは言えない。彼の音楽は「ノイエ・ムジーク」の世代に属しており、音楽学者ユルク・シュテンツルによれば、この世代は第一次、第二次両大戦の両方か一方の体験を意識していた世代ということになる。音楽家としてのアイネムの際立った特徴は、彼より若い世代の音列音楽 (セリー音楽) を全く受け付けなかったことだ。

アイネムの自伝その他の中に、ブレヒトとの共同制作を巡る記述がある。結局この計画は挫折するが、題名だけが残った (『大物と小物の海賊の喜びと苦しみ』)。アイネムは「古くからの争いが私とブレヒトとの間で再燃してしまった」と述べている。「古くからの争い」とは、オペラにおいて、音楽と言葉のどちらが優位になるべきかという論争のことである。ブレヒトは「言葉」、アイネムは「音楽」を主張して譲らなかった。この決裂した計画について、ブレヒトの側からのコメントが皆無であることを、アイネム研究者トーマス・アイクホフはその論文の中で報告している。

フリードリッヒ・デュレンマットの脚本によるオペラ『老婦人の来訪』の成立事情についても、アイネムはブレヒトの場合と全く同様、自伝およびエッセー『ブレヒトとデュレンマットとの対話』等の中に記述している。その中でアイネムは、ブレヒトとの場合と異なり、デュレンマットとは意見の一致をみたことを次のように述べている。「オペラの基本的な脈絡は言葉によるよりも音楽によってより強く明らかにされるのだから、言葉の厳密さの過剰が邪魔になりうる瞬間が生じてしまう、と彼は語った。これは私の見解と一致している」

裕福な貴族の家庭に生まれ育ちながら、両親が留守勝ちで寂しい幼年時代を送ったアイネムはまた、20歳の頃にはスパイの嫌疑をかけられてゲシュタポに拘束された。これらの実体験に基づく内面の欲求にのみ従って作曲した彼は、いかなる主義、主張にも与せず、時流に迎合することもなかった。

モーツァルトを信奉していた彼のオペラ観は、100年余り前の劇作家フランツ・グレルパルツァーのものとはほぼ符合する。両者を結ぶこの流れはヴァーグナー派の奔流に押し流されながらも20世紀のアイネムにまで細々と命脈を保った印象を与える。そしてこの流れは、「新しい時代の流れ」と共に常に車の両輪となってウィーン音楽史を支えてきたように思われる。なぜなら、こちらモーツァルト派の人々は、音楽の本質は何か、音楽の領域はどこまでなののかについて常に考え、見守り続けてきたからだ。